

点数 各項目20点満点

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモア	意外さ	合計	書評
1242	備えあれば	木綿めも	毛利嵩志	15	18	15	15	18	81	唐突にセリフを挟むところなど、文章と情報の展開が上手です。「それだけ、ただそれだけのバイト」という最後のセリフに、見て見ぬフリをする主観人物の態度を表現していて、それも巧み。
1267	心当たり	鍋島子豚	毛利嵩志	15	18	18	15	15	81	幽霊ものながら人の怖さを中心に据える上手さですね。当時どういう評価をしたか覚えてませんが(失礼)、2段階に分かれた幽霊の描写、ちゃんと2発目は解像度を上げているのが巧みです。
1289	人体ガチャ	青空あかな	毛利嵩志	15	15	15	18	18	81	主人公の行動の意外性、その奥に想像できる「1万円で買える中身」、歯の質感などが素晴らしい。ガチャがどこにどういう状態であったのかを描けていれば、さらに高得点だったかも。
1384	初体験	柳家花ごめ	毛利嵩志	12	15	15	18	12	72	これは素直に『初体験』という題名を加味しても、実は怪異 자체は実在していた、という解釈でよろしいのでしょうか。その対象に「福笑いの女」を持ってくるのがセンスですね。
1431	妹	田沼白雪	毛利嵩志	12	12	15	15	15	69	主人公の意図は「遺体を埋める場所で靈現象を散らす」ように読めます。ただ掘るのは庭と裏庭ぐらいで、そう広くはないでしょうから、「どこに埋めよう」とはなりにくいんじゃないかなと。
1462	まいちゃん	京朔太郎	毛利嵩志	15	15	15	18	15	78	『アルジャーノンに花束を』(の翻訳)を思わせる仕掛け。表記を変えて語り手の交代をするのも上手い。日記の内容が不気味ではあるのですが、裏の意図がもっと感じられていたら良いかも。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	毛利嵩志	12	12	15	18	15	72	女の幽霊事件と最後の真相が別々なので、意表は突きつつも単発的な効果になっています。例えば「何だ、幽霊ってうちの母親じゃないのか」みたいにまとめると有機的に繋がるかも。
1689	ペット	やま	毛利嵩志	15	12	15	15	15	72	彼女はそんな性だから、娘もペットのように可愛がっている——何なら内実は、A子のように虐待されている、という意図かもしれないですが、実際にはどうなのか、ほのめかしが欲しいかも。
1785	狩り	青空あかな	毛利嵩志	12	12	15	18	18	75	わずか3行で全完結という挑戦作ですが、完全に閉じたぶん外側に想像を広げる余地がない、という弱点もあります。復讐で殺すのか別の理由があるのか、でもう少し広げられそうなので。
1941	ある冬の日	やま	毛利嵩志	15	15	15	18	15	78	ラストで娘の姿や声を出してしまって、意味は通じるのですが面白味には欠けてしまうので、スーツケースの動きだけで読者に察知させる、というのは地味ですが重要なテクニックです。
2043	憑依	深山隨園	毛利嵩志	12	15	15	18	15	75	実は息子が「大人」だったのがラストの仕掛けなのでしょうか。決まっている、というほどではないですが、どこか牧歌的で解釈によっては不気味である、というムードは出ていると思います。